

鈍行記者

●あるジャーナリストの歩んだ道

久保田 清

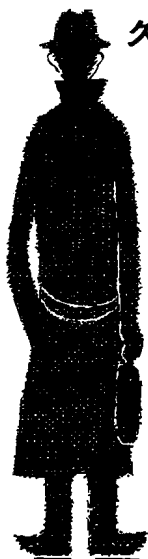


彌生書房

鈍行記者

●あるジャーナリストの歩んだ道

久保田 清



彌生書房

© 1968

検印省略

鈍行記者

680円

昭和43年1月15日 初版発行

著 者 久保田 清

発行者 津 曲 篤 子

印刷者 古 井 博

発行所 株式会社
彌 生 書 房

東京都新宿区牛込中町15番地
電話・東京(269) 7013・7014

同興印刷・三洋堂製本

鈍行ばんざい

——序に代えて

塩田丸男

横光利一の有名な小説の一節に「列車は沿線の小駅を小石の如く黙殺した」という言葉がある。多分、この列車は特急列車であろう。

この特急列車の非情さは、特急人生の非情さに通ずるだろう。エリート・コースを順調に歩いた人の人生というものは、時めいて花やいで見える反面、非情で、索漠としていてまことにつまらないものだ。

鈍行記者は、事件記者のようにテレビの人気番組にはならないかもしれない。しかし、ひとびとの共感を生むという点ではいずれであろうか。私なら、一途で、しかしのろまで、奇妙にロマンチックで、人生にどこか意地を張っているような青地仙三のほうに、はるかに親しみを感ずる。

レイモン・ラディゲの言葉を借りて言えば仙三のような生き方は「もはや時代遅れであるのかもしれない」が、しかし、ここにはたしかに人生が感じられる。庶民の系譜——といえば通俗的だが、明

治の末年に生まれ、大正、昭和と三代の空気を呼吸した、平凡な人間の生き方が、まさしく描かれている。

仙三が彼の人生の終局に近づいたところで物語は終わっている。しかし、それにもかかわらず、仙三は「さあて」という。私もやはり、さあてそのあとは？ とあと何年もないだろう仙三のこれからの人生に興味を持つ。

続・鈍行記者がいつの日か生まれてくることを期待したい。

目次

第一部 7

第二部 137

鈍 行 記 者

第一部

もともと仙三は好きで新聞記者になったのではなかった。新聞社のほかには、どこも雇ってくれるところがなかったので、新聞社に入ったのだった。

昭和の初期はコミュニストに弾圧のあらしが吹きすさんだ。昭和三年の三・一五事件、翌四年の四・一六事件など、全国一斉に行なわれた検挙のため、大中市の警察の留置場が、どこもかしこも満員になったほどだった。

四・一六事件で潰滅的打撃を蒙った共産党が、ようやく再建された頃、仙三は二十四歳、まだ詰めえりの学生だった。S市に帰省していた彼は、身に迫った危険を感じて近郊の旅館に潜伏していたが、再建共産党の全国一斉手入れの網にかかり、春先の明けがた、踏みこまれた特高刑事たちに、あっさり「御用」になった。留置場が先客の思想犯でいっぱいだったため、仙三はたった一つしかない女のブタ箱に詰めこまれた。

この房は男用の鉄扉とちがって、時代映画で見るといふような太い木造りの格子だった。鈍い光が廊下と

小さい高窓から射しこんで、狭い部屋にはの明るい格子模様影をおとしていた。DDTのないころのブタ箱は、しらみの巢のようだった。細ひも類をとりあげられて、着物の前をバサバサした女たちが、絶えずどこかをぼりぼり搔いていた。沈黙を強いられて、長い一日を送る彼女たちは、しらみ捕りが退屈な時間を消す唯一の方法のようだった。なかには捕ったしらみを前歯で噛み殺す女がいた。パチッと小さい音がすると、女はベッベッと亡きがらを吐き出すのだった。ほかの女たちは、それに関心を示さなかった。馴れっこになっていたからのようだった。

部屋には独特なおいが漂っていた。汗と髪油のほかに、不潔な女体から発散する、すえたにおいが混っていた。かぐわしくはなかったが、若い仙三にとっては、それでさえ欲情を刺激するみだらなおいだった。

翌日からの取調べは、まず殴ることで始められた。肉体を痛めつけて、へとへとにしたところで取調べに入り、ちょっと調べが壁にぶつかる、また叩いて自白を強いるのだった。

刑事たちは拷問役となだめ役に分かれていた。責め道具を使って、火責め水責めをたっぷり見舞ったところで、まあまあとなだめ役が仲に割って入り、あまり無茶をするなと拷問役をたしなめ、苦しかったらうと仙三にやさしい言葉をかけるのだった。呼び出されて取調べを受けるときは、きまってる反覆だった。そして彼らは少しづつ、組織の図面を正確なものに作りあげ、いもづる式に検挙して、潰滅的打撃を与えるのが仕事だった。

二週間を過ぎて仙三の身心がぐたくたになったころ、刑事たちは好んで母親のさだ代のことを持ち出した。彼らは、さだ代を世にも不幸な母親だと嘆いてみせ、転向して実践運動から身を退くなら、

すぐ釈放すると仙三を説得につとめた。親孝行でない仙三はそれだけに、恥部に触られたような感じだった。たとえ彼らの常套手段だということを知ってはいいても、幼いとき父親を喪った仙三にとって、さだ代はたった一人の母親にちがいなかった。

彼が転向誓約書に拇印を押し、娑婆の風に当たったのは、それから十日あつた。警察の通用門から通りに出たとき、うしろから駒下駄の音がきこえた。ふり返るとさだ代だった。

「おとつあんがきいたら、草っぱの蔭で泣くべなあ」

さだ代が悲しげに仙三を見た。

「おやじの顔さえ、俺は覚えちゃいないよ。なにが草っぱなもんか」

仙三はさだ代と肩を並べて歩きながら、吐き出すように言った。

マルキシズムの正しさを認識しながら、転向誓約書に朱肉の指を押したということは、テロに負けたと言われても、卑怯者とののしられても、しかたのないことだった。彼は思想的に前進することはばまれたが、退くことも出来なかった。とすれば、そこで足踏みをしているよりほかに、どうしようもなかった。しかし、仙三がその時点で足踏みをしていたとしても、静止しているとはいいがたかった。社会の方でどんどん前進を続けているからだった。

彼は一緒に歩いているさだ代に、

「俺はおっかさんのために、裏切者になってしまった」

と、転向を母親のせいのように言った。自分の弱さを棚にあげておき、さだ代ばかりを責める言いかなかった。

「そんなこと言っても、書生は勉強ばかりしていればいいんだべに、共産党つったら、赤だと巡查さんが言ってたけ」

「ふん、なにが勉強だ。くその役にも立たない学問なんか、くそくらえだ」

「んなら、学校ば止めんだかや」

「止めるんじゃないや。止めさせられるんだよ」

「まんず」

さだ代はびっくりして足をとめた。

仙三は母親を置いてけぼりにして、どんどん足をはやめた。足だけは前に進んでいるものの、思想の立ち往生に、彼自身真空地帯に置いてけぼりをされたような孤独をひしひしと感じていた。

明治の黎明期に生まれ、文明開化の時代に、貧乏武士の息子にとついだ百姓娘が仙三の母親だった。忍従を美德として教育されたさだ代は、子供らにも献身的だった。一家の支柱になっていた兄の利治は、仙三の実践活動を否定はしたが、主義そのものには共感を示さないまでも、同情的だった。仙三はさだ代と利治に庇護されながら、大人の仲間入りをした年令になってまで、徒食して暮らすわけにはいかなかった。コネを求めて方々の就職試験を受けたが、いつも失敗を繰り返したのは、身許調査で「危険思想」を持っていたためだった。この積み重ねのうちに、自暴自棄の生活がはじまった。付き合う友人の顔ぶれが、ガラリ変わった。やけで始めた酒も、反吐をはくたびに腕をあげて、いっぱしの酒のみになった。酔えば女を抱きたくなり、さだ代の乏しい財布から金をくすね、遊郭に泊って朝帰りをするなど、一人前の無頼の徒に仕上がってしまった。

こうして四年を過ぎたころ、仙三は地元の小新聞社に見習記者として採用された。彼は意外だった。試験は受けたが、当然はねられる、と決めていたからだ。それだけに、喜びは大きかった。そして、将来性はどうかであろうと、この職業以外に進むべき道は残されていない、としゃにむに縋りついて離れまいと思った。

玉子の殻をいっばい身につけて、変てこな記者が生まれ出た。仙三は先輩記者について、ひととおり取材のコツを覚えてから、文章を二の次にして、事象の実体を正確に掴むことに力を集中しようとしてめたが、それは牛歩のように、遅々として進まなかった。

あるとき、ふとしたことで若い女と知り合った。それが美江だった。痩せぎすで弱々しかった。胸が少し悪いので、ふとれないんです、とあっさり言われて、仙三はなにも言えなくなった。肉付きのよくない高い鼻と大きな目が楚々として彼には魅力だった。何度も会っているうちに、手を握ることからはじまって、抱いて唇を合わせるようになった。腕の中で美江の体が、ポキリと折れそうな可憐さだった。

仙三が結婚しようとしたのは、美江と知り合ってから、二年以上も過ぎてからだ。彼女は頭をたてに振った。ところが、両方の親が反対した。そのころ親の意見は絶対だった。さだ代は、始めから肺病の娘をもらう馬鹿は、お前ぐらいなものだ、と仙三をののしった。左翼で検挙されてからこのかた、文句一つ言わなかった兄の利治もさだ代を支持した。また、美江の母親も、夫を亡くしてから、女手一つで彼女を育てただけに、結婚したら美江は死んでしまふ、と反対したのだった。

こうして仙三と美江は別れた。いまの若者たちの考えからすれば、想像もつかない煮え切らなさだ

った。

その後、美江は半年も経たないうちに、他の男と結婚してしまった。仄かに仙三の耳に入ったところでは、美江の母親ぐるみ引きとられることで、彼女が結婚を承諾したということだった。

彼女が嫁いだので、仙三はすべてをあきらめた。そして十一年師走に、二つ年下の朝代と見合い結婚をしたのだった。二十八歳だった。

夫婦生活をはじめてみると仙三は、たとえ見合い結婚でも、夫らしく、妻らしく見えることを発見した。二人の思想や趣味、嗜好の相違などは意に介していなかった。彼は朝代に、なにもものも期待していないからだった。年が改まってまもなく、受胎したらしいと朝代に告げられて、仙三はびっくりした。若い男女が性の営みをしたなら、子供をもうけても不思議はないはずなのに、自分の分身が朝代の腹の中で成長するということは、うっかりして予定に入れていなかった。彼は父と呼ばれることに、羞恥とおそれを抱き、複雑な心境だった。

梅雨が明けたころ、仙三はM紙の前身のT紙に採用された。仙三にとっては、待望の東京紙だった。T紙でN町に通信部を新設するため、地元紙の既成記者を物色していた。だがN町は陸羽東線沿線の温泉で、歓楽郷として名が通っていた。独身者は芸者遊びにうつつを抜かして、取材を忘れては困るとあって、結婚後半年しか経っていない仙三に、白羽の矢を立てたのだった。『青地仙三ならば、結婚後日も浅いしするから、女関係で間違いは起こすまい』と考えたようだった。仙三はこのときほど、結婚を有難いと思ったことはなかった。

じりじりと照りつける日に仙三は、ふくれた腹を抱えた朝代を連れて赴任した。落ち着く先が学友

だった大原の持ち家なので、未知の町に乗り込む不安はなかった。彼の父親は町長の現職にあって羽振りがよく、大原旅館の当主でもあった。長男の彼は、一つになる女兒を残して細君に先立たれたばかりだった。通信部になる家は、彼の祖父母のために建てた離れたが、まだ隠居するには早い、と祖父母ががえんじないので、空いたままになっていたものだった。

やっと通信部らしくなり、仕事も軌道に乗ったところ、朝代が分娩のためにS市に帰った。仙三が半独身者のような形になると、大原は毎晩遊びにきて、酒を汲み交わしながら、細君に先立たれた不幸をなげいた。それがひと通り終わると二人は、行きつけの料理屋兼芸妓置屋に上がって呑み足し、婦りはめいめい芸者兼酌婦という二枚鑑札の女と連れ立って、仙三のうちに泊るのだった。

紅葉とスキー・シーズンの切れ目に入ったころ、仙三は「男子生まれ、母子とも元氣」という電報を受けとった。

まもなく、義母が初孫の一洋を背負い、朝代に付き添ってきた。姑は台所からガラス戸越しに見えるプールの広さにおどろき、隣りの外湯で滝に背中を叩かせて、満悦のていだった。

彼は十五年三月三十一日まで、T新聞社にまる三年近く勤め、瀬戸、畑中、松島の三支局長に仕えたが、S支局勤務に戻ったときは、畑中が支局長になっていた。彼は販売店主とは息があい、夜な夜な連れだって芸者買いに出かけたが、支局員の支持が全然なかった。ことに次長の小田原とは犬猿の仲で、ろくに口もきかなかった。

仙三が辞表を提出する羽目に陥ったのは、翌年春の彼岸を過ぎたころだった。すでに畑中が本社に